市長賞　食卓から生まれる平和

今川小学校　６年　大谷（おおたに）　心（しん）

私にとって平和とは、毎日家族みんなで食卓を囲み、いっしょにご飯を食べることができる、この当たり前のことだ。しかし、世界に目を向けると、紛争や貧困によってその「当たり前」を奪われている同世代の子どもたちがたくさんいる。彼らにとっての一食は、私たちが何気なく残してしまうご飯とはちがい、生き延びるための命そのものなのだ。

また、これは遠い国だけの問題ではない。歴史をふり返ると、かつての日本も同じだった。今の日本は好きなものを好きなだけ食べられる豊かな社会だが、ほんの八十一年前の戦争中はちがった。空しゅうの恐怖におびえながら、わずかな配給を家族で分け合って飢えをしのいでいたのだ。たとえごうかな食事が目の前にあっても、明日生きているか分からない恐怖の中では、決しておいしいとは感じられないはずだ。しっそなおかずであっても、明日を恐れずに笑顔で食べるご飯こそが本当に「おいしい」と言えるのだと思う。

ニュースの映像を見て、小学生の自分には世界の戦争を止める大きな力はないと無力さを感じることもある。しかし。世界を変えることはできなくても、自分の身近なところから平和を作ることはできる。目の前の食べ物をむだにせず、感謝して食べること、そして、自分の周りの友達や家族と意見がちがっても、話し合って解決することだ。

食卓から聞こえる家族の笑い声。この小さな幸せを守り、世界中へ広げていくために、まずは私の目の前にある日常を大切にしていくことから始めていきたい。